

国際文化学部鹿毛敏夫教授の 「インド副王 アフォンソ・デ・ノローニヤ～義鎮に優れた武器など贈与～」 が掲載

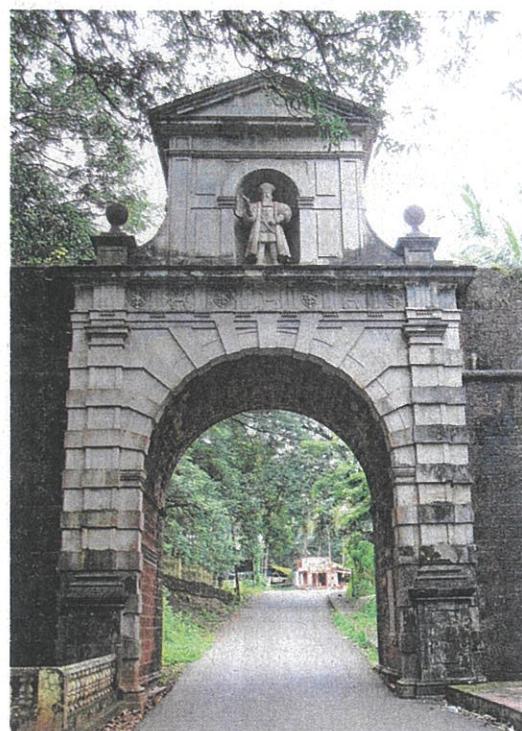
●大分合同新聞朝刊 2023年1月20日(金)

16世紀ヨーロッパのイエズス会は、日本の実質的権力者は地域の戦国大名と捉え、その領国をある程度独立した「国」と認識し、大名そのものを「国王」として評価していました（松本和也「イエズス会がみた『日本国王』」）。確かに、同時期の西欧諸史料を読むと、各地の戦国大名を、例えば「尾張の国王（織田信長）」、「山口の国王（大内義隆）」、「河内の国王（三好義継）」などと表記しています。

インド副王アフォンソ・デ・ノローニヤ 義鎮に優れた武器など贈与

大友時代を
生きた人々

鹿毛
敏夫



ボルトガル植民地だったゴアの入り口に立つ「インド副王の門」

||月1回掲載||

1551年、西日本各地で2年3ヶ月にわたるキリスト教の布教活動を進めたイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルが離日します。その際、大内義長・大友義鎮（宗麟）・松浦隆信の3大名は、インド副王のアフォンソ・デ・ノローニヤに親書

を送りました。ボルトガルは10年に、インド南部のビジャープル王国を攻め、マラバール海岸沿いのゴアの地を植民地として手に入れました。それ以降、ゴアは、ボルトガルのアジア進出の拠点となり、ボルトガル国王はインド副王を駐留させて、現地支配を統括させていました。そのインドの名を、日本から親書を届けたのは、「豊後の國王」大友義鎮の家臣でした。江戸時代の儒学者新井白石は、その家臣の名を「植田玄佐」と推定して

その後、ノローニヤは、「日本で最も勢力のある豊後の國王」と称される大友義鎮に、「大変優れた武器およびその他の品々」を返礼として贈ったことが記録されています。

実際、ヨゼフ・ヴィック編「印度史料集」には、イエズス会の宣教師でありインド管区副管

区長の地位にあったマルシオ・ル・ヌーネス・バレトが、54年の日本渡航に携行した品々の一覧が収載されています。

います。玄佐は、ゴアの黒パウロ学院で洗礼を受けてロウレンソ・ペレイラと名乗りますが、その際に代父（受洗立会人）を務めたのは、インド副王のノローニヤでした。

その後、ノローニヤは、「日本で最も勢力のある豊後の國王」と称される大友義鎮に、「大

変優れた武器およびその他の品々」を返礼として贈ったことが記録されています。

実際、ヨゼフ・ヴィック編「印度史料集」には、イエズス会の宣教師でありインド管区副管

区長の地位にあったマルシオ・ル・ヌーネス・バレトが、54年の日本渡航に携行した品々の一覧が収載されています。

まず、銀製十字架、キリストの十字架像、聖母マリアの祭壇背後の飾りついたて、錦織り祭壇用天蓋などの祭具。次に、鉄砲、ガラス製の杯・器・ランプ、砂時計、手動時計、小型ナシフ、拡大鏡、真ちゅう製水差し、真ちゅう製喫煙具（きせる）、クリスタルグラス製取っ手付きコップ、ガラス製世界図などの物品。さらに、書籍では聖書や聖人人名録から、プラトンやアリストテレス、プレマイオスの書物に至るまで、さまざまな品物が、インド副王やボルトガル国王との外交関係を介して戦国時代の日本にもたらされたことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）